

北澤義弘先生、悠久の旅人に

竹 内 佑 利 子

北澤義弘先生は神奈川県平塚キャンパス開設時に経営学部教授として就任されました。この三月、退職なさいます。キャンパスはとても寂しくなるでしょう。

今年（平成五年度）北澤先生の英語の授業を受けた学生たちの話をきく機会がありました。そのなかから幾つかエピソードや感想を紹介しましょう。北澤先生のお人柄および、学生たちとのユーモアと知の刺激に満ちた交歓が浮かびあがってくると思うからです。

「四月第一週に、北澤先生が入っていらしたとき、僕ら、北澤先生のクラスではありません」と言ってみたら、先生は、「そうだったかね」と仰って、あっさり出ていかれた。やがて戻ってらして、「やっぱりこの教室だったよ」と何ごともなかったように、講義を始められた」

「講義の始めに『テキストが違います』と言うと、『あ、そうか』といって出ていかれる。三〇分ぐらい経ってから戻っていらっしゃる。何回かいたずらをしたが、そのつど教務課まで行って確かめられたとか。反省した」

「『人類の起源』とか、『西欧の歴史』という話題をそれとなく質問の形でもちだすと、申し訳けないことに、たちまちノツてくるのが北澤先生。でも、先生の話は豊かで奥が深く、知らなかったことばかり。それがすごくおもしろい」

「北澤先生の『雑談』は視点が新鮮で啓発させられる。いつまでも聞いていたいと思った。一つの事象でも、縦と横から解き明かしてくれる。つまり現代の問題でも、時代的に太古の昔に遡り、世界地図を書いて説明という広がりがある」

「おしゃべりしたり眠ったりしていると、髪の毛を一本抜くと仰った。でも、お昼のすぐ後の時間、教室全体が眠むそうなきときは、五分間休憩して、また元気を出して勉強しようと励ましてくださった」

「若者らしく背を伸ばして姿勢を正しく、と注意された。先生のしゃんとした姿勢、張りのある声、もう定年だなんて信じられない」

ほんとうに信じられません。惜別の気持ちを学生と分かちあっています。

でも、とても幸せなことなのかもしれません。というより、先生ご自身が幸せと感じられているようです。横浜市立大学から神奈川大学と、社会に十二分に貢献し教育者としての天職を全うされて、活力に溢れているうちに、目覚めている時間をすべて自分の好きなことに充てることができるのですから。

先生の夢はいっぱいあって、ステッキ屋さんの開業もそのひとつです。自ら選んだ最高の材質の木を丁寧に彫って一本何十万円もするステッキを扱うのだそうです。逗子の駅前の広大なお屋敷の一角に「だんご」としてした赤いのれんを下げた茶屋を開くのもいい。それから油絵や日本画の修業を続け、歌の道(連句)に精進しよう。シルクロードを走破したい。イギリスかアイルランドに移り住んでみたいという夢は、夢で終わることはなさそうです。

先生は旅路にある自分を、脳裏に描き続けておられるように思われます。ステッキはいうまでもなく、歩みの伴侶、茶屋は道中に一服するところです。連句といえは芭蕉と旅を思い出しますし、絵は旅の心象風景の記録です。イギリスはか世界の旅は、旅人であったD・H・ロレンスに誘われてでしょう。

北澤先生は杜の都で『文学の伝統と交流』等の著書で知られる土居光知氏について英文学を学ばれました。自由闊達にしてオクスブリッジ的な学問の道場であった由うかがっています。「麒麟」創刊号の北澤先生の論文「十七世紀」は、十七世紀イギリス文学に至るまでに、地球上の遺跡発掘に見る先史時代を説き起し航海時代を概観し近世の日本文化に言及し、生命の「しぶとさ」に思いを馳せ、「人類の発生当初の頃の姿を虚心に省みる余裕を求め」て締めくくられます。「麒麟」二号の論文「神、いよよ遙けく、晋く、冷厳なるもの」では、湾岸戦争の写真集からJ・ミルトンの「失楽園」を想起し、サタンの近代性とミルトンの新しい宇宙が論じられます。「天の神は人の行動が天の道と齟齬する時如何に冷酷無慈悲となるか」とは我々後輩への慈悲溢れる忠告だと思えます。

北澤先生の論文には、知の旅の道程に目があるなら見るはずのものを見た人が得る、すべてが注ぎこまれていきます。ロレンス、ミルトン、シェークスピアなどの道しるべがあり、先生が筆を執るために腰をおろす辻々はまた、天から地から縦横に伸びてくる道の交差点でもあるようです。それとも、峻険な崖を下る奔流も静かに湧く泉も併せて流す大ドナウを旅する船乗りにも、先生を模倣することができるでしょうか。これからも長い歳月にわた

る麗子夫人と相携えての北澤先生の旅が、御健康と御多
幸に恵まれ且つよい刺激に満ちたものでありますように
祈り上げています。